武蔵野日曜聖書講筵

汝は何処に居るか
――創世記第３章９節――

１９９０年１月21日
小池辰雄

神の啓示の本　神の顕現　無者　無道の道　キリストにとっ捕まる　天地正大の気　福音は力なり　楽園喪失　神に従って百％に歩いた唯だ独りのひと　キリストの中に自分を投げ入れる　受け身の信　キリストの化身　汝は何処におるや　放蕩息子の砕け　帰入は祈入　「１月４日　楽園喪失」『パラダイス・ロスト』（失楽園）　第二の宗教改革　霊然の世界に魂は散歩する　祈り

【創世記2】

7 エホバ神　土の塵を以て人を造り生気をその鼻に吹き入れたまえり、人即ち生霊となりぬ。 8 エホバ神エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其処に置きたまえり。 9 エホバ神観るに美麗く食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知の樹を生ぜしめ給えり。……
15 エホバ神その人を挈て彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給えり。
16 エホバ神その人に命じて言いたまいけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得 17 然ど善悪を知の樹は汝その果を食うべからず汝これを食う日には必ず死ぬべければなり。

【創世記3】

1 エホバ神の造りたまいし野の生物の中に蛇最も狡猾し。蛇婦に言いけるは神真に汝等園の諸の樹の果は食うべからずと言いたまいしや。 2 婦蛇に言けるは我等園の樹の果を食うことを得 3 然れど園の中央に在る樹の果実をば神汝等之を食うべからず又之に捫るべからず恐らくは汝等死なんと言給えり。 4 蛇婦に言いけるは汝等必ず死ぬる事あらじ。 5 神汝等が之を食う日には汝等の目開け汝等神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたもうなりと。
6 婦樹を見れば食うに善く目に美麗しく且智慧からんが為に慕わしい樹なるによりて遂に其の果実を取りて食い亦之を己と偕なる夫に与えければ彼食えり。 7 是において彼等の目俱に開けて彼等その裸体なるを知り乃ち無花果樹の葉を綴て裳を作れり。 8 彼等園の中に日の清涼き時分歩みたもうエホバ神の声を聞きしかばアダムとその妻即ちエホバ神の面を避けて園の樹の間に身を匿せり。

９エホバ神アダムを召(よび)て之に言たまいけるは 汝は何処(いずこ)におるや。

●神の啓示の本

聖書は神さまを大前提として、神の行為、神の言、それの顕現、それに基づいて語られている本です。自然科学の世界とは次元がちがう。自然科学的な真理は、もちろんそれとして大いに尊重しなければならないんですが。聖書はそれと関わりのある面ももちろんありますけれども、辻褄を合わせようと思ったら、却っておかしくなる。大体、アダムとエバというのを神さまが創造して、人類はそこから始まったなんていうのは、これはお伽話みたいなものだ。いわゆる人類学や自然科学とはおよそ違うわけです。

そういう意味で、聖書は神の啓示の本である。人間が思索したり研究したりしてでき上がった本ではないということを、しっかり前提として持っていないというと、読みそこなう。神話的な表現でもって驚くべき真理が語られているので、

「そんな神話はとても受けとれない」

と言ったら、それだけのはなしです。

そういうわけでありますので、そういう角度から読む。たとえば、神さまを私たちがいくら望遠鏡で見たって出てこないし、冥想したって、それは分からない。分からないというのが本当なんです。それでは、

「どうやって信ずるんだ」

と。

「仕方がないから、聖書に書いてあるから、信じておこう」

なんて、それくらいのところが大分多いようですね。ところが、私の体験から言いますと、マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの福音書、この新約聖書の福音書を読んで、

「こんな事があるだろうか?」

なんて言って、いつまでもいわゆる「研究」をしていては、聖書の世界には入れない。

●神の顕現

福音書を虚心坦懐に読むと、キリストはケタちがいのひとです。お釈迦さんがどんなに偉くたって、それはもうケタが違う。釈尊はいろいろな難行苦行して、最後に悟ったという、そういう人ですから、悟りの世界です。イエスというひとは、もう始めから神を顕現しているひとなんです。

たとえば、ここに花がある。これは太陽の光の顕現なんです。太陽の光は見えない。見えない光、無色の光、その光熱が花に顕現して、あるいは赤くなったり、桃色になったり、白くなったり、香がちがったり、形がちがっている。花は、花を見て太陽を見る人は本当に太陽を、花を見ている人です。

だから、福音書のイエス・キリストというひと――「キリスト」というのは「救い主」「油注がれたる者」ということ――このひとを見て、

「ここに神さまが現れている」

ということを見る。彼自身がそう言っているんだ。

「我を見し者は父を見しなり」

と。「私を見た者は父なる神を見たのだ」と。キリストは自分の神さまのことを「父」と言っている。自分はその子だと。「父」でも「母」でもいいですよ。要するに、人間の世界で一番信頼しているところの一家の主人でありお父さんであるところのもの。キリストは神さまのことを「父」と言っている。けれども、神さまは「霊」である。いかなる偶像もこれを描くことができない。

●無者

人格的な存在として、また霊的存在として、キリストは神を自分の一切としていた。そして、

「自分は何ものでもない」

と言った。だから、私はキリストのことを、

「無者」

と言っている。世界中でそんなことを言っているひとは、あるいは無いかもしれない。この無は虚無ではない。自分が無いということ、私心がない「無私」ということです。

私心があることを「罪」という。エゴイズムです。自我主義。これはエゴイスト。万人はエゴイストです。エゴイストの親玉はサタン、悪魔です。これにはたくさん子分がいる。ところが、このエゴイストの親玉とキリストは曠野で霊的な闘いをして、これに勝ってしまった。イエスは無私のひとである。私が無い。「私が勝った」なんて言うのではない。

「神さまが私をして勝たしめた」

ということ。一切を神に委ねていた。だから、無者なんだ。無者が――イエスという一がゼロで割られると――無限大なんだ。

「何ものでも無い」

ということはゼロを分母としている。そうすると、無限大なる神さまがここに、この一に現象したわけです。だから、

「私を見た者は神を見た」

ということが言える。そのひとは何者でもない。自分が何者でもないひとが、本当は神さまを現していたんだということです。

●無道の道

このことを先ず本当に受けとってください。いろいろな聖書入門書なんかあったって、

これがダメなんです。「キリスト教」ではない。「教え」ではない。「キリスト道」。キリストは神からの道であり、神への道である。道なんです。道者です。

しかも、その道は

「これこれが道である」

なんていう、信仰箇条でもって言うような道ではない。これはむしろ、老子と同じように、「無道の道」なんです。道無き道なんです。「これが道でござる」なんていう道ではない。

空を見てごらんなさい。鳥は「これが道である」といって、どこか鳥の道がありますか。無い。全然ない。けれども、鳥は自由自在に空を飛ぶ。あの姿が本当の姿です。「在る」という姿の本当の姿は鳥を見れば分かる。風に乗っかっている。完全に風の力で動いている。だから、完全に神さまの力で動いている。

聖書は〔神の〕ドラマですからね、サマリヤの女とキリストが語っていたら、自分がサマリヤの女になって読まないと、聖書は読めない。「そうですか」と言って、対象化して読んでいたらダメです。自分をそのドラマの中に入れて、身体（からだ）で読む。頭で読んでいたらダメです。全存在で読む。身体で実は、見るんです。聴くんです。捕まえられるんです。聖書はそういう読み方をしないと、いくら「聖書の研究会」なんてものを何年やったって、くたびれてしまうだけのはなし。ところが、大体、そういうのが多い。ヨーロッパの神学が行き詰まるのも、そういう研究から来ているからです。

「ヨーロッパの神学の悩みを本当は解いているのは、先生の無の神学である」

と。私は今から8年ほど前の古い手紙（『エン・クリスト』誌42号掲載）を引っくり返していたら、そういう手紙が出てきてびっくりした。私は人の手紙や葉書は全部とってあります。正直、私は自分の主観でものを言っていませんから。

●キリストにとっ捕まる

この福音書のキリストにぶつかって、降参するまでは、聖書の世界に入れない。このことは、私は何回言うかわからない。

「分かるの分からないの、どういう意味の」

と、そんなことではない。

「キリストの言葉、キリストの行為には、もう完全に参りました」

と降参すると、キリストにとっ捕まる。そうすると、その世界に入れる。もの凄い力がくる。聖書は力の本ですからね、凄いですから。いいですか。

私ははっきり言います。福音書を読んで、キリストにおいて神が顕れているということを、本当に全存在で「然り」と言えるまでは、この世界には、聖書の世界には入れない。いくらギリシア語を勉強し、ヘブライ語を勉強したってダメだ。

「ギリシア語やヘブライ語がわかる人が、原語で読める人の方がなお聖書がわかる」

なんて、冗談言うなと。私もギリシア語やヘブライ語を知ってますよ、けれども、そんなことではない。

それが聖書を読む態度の本当の姿です。それでもって読まなかったなら、もう徒労に終わる。古典の書として研究するのはまた別問題です。いいですね。

とにかく、

「我が言は霊なり、生命なり」

で、

「意味ではないぞ」

とキリストは言っている。私たちは本当に霊の世界、生命の世界に入る。「小池先生はなぜあんなに元気がいいのか」と。それは元気をいただいているからです。元気がいいのではない。元の気が来ているから。元気とは素晴らしい言葉だ。これは根元の気なんです。

●天地正大の気

藤田東湖ではないが、「天地正大の気」なんです。

「天地正大の気
粋然として神州に鐘る
秀でては不二の嶽と為り
巍々として千秋に聳ゆ
注いでは大瀛の水と為り
洋々として八州を環る
発いては万朶の桜と為り
衆芳与に儔ひ難し
凝っては百錬の鉄と為り
鋭利兜を断つ可し。」

素晴らしい言葉だね。

「発いては万朶の桜と為り
衆芳与に儔ひ難し」

とある。桜は日本の象徴だね。「天地正大の気」が開くと桜となる。あの藤田東湖というのは非常に霊的な男だ。気の世界が実は一切の創造の元だ。神の気が創ったと言う。

「泥でこねたものに神の息が吹きかかったら、これが生ける人になった」

と、創世記の神話に書いてある。地的な要素に天的な要素が入ってきたというわけです。あれも、「ひと」という字はヘブライ語で

「ネフェシュ　ハーヤー」「生気」

という言葉なんです。ルターが「レベンディゲ　ゼーレ」（生ける魂）と訳している。「ネフ

エシュ」という字はそういう「気」とか「魂」という字です。「気」にはもうひとつ深い、「ルーアッハ」という言葉がありますけれども。

人間の脳ほど、宇宙で不思議なものはないではないですか。一番不思議なものは人間の頭です。この構造は大変なものだね。80年前の小学校の時のことが、今想い出そうと思ったら、浮かんでくるからね。どういうことになっているんだろうね、人間の頭というものは。30年位前のことは忘れても、80年前のことは焼き付けが強いから。小学校のことを書けといったら、私はどんどん書けますよ。

●福音は力なり

とにかく、肉体はたとえ死んでも、死なないところの霊はまた新しい「霊体」を纏(まと)うことになる。そういう世界を聖書は開示していますから。

人生でいろいろなことにぶつかるでしょ。若い人は入学試験に失敗しただとか、失恋しただとか、結婚をやりそこなっただとか、いろいろなことがある。いいよ、何があっても。そういった事柄にぶつかって、このキリストを捕まえたら、キリストに捕まったら、

「もうどうなっても結構でございます」

ということになりますよ。よく、「幸せ」ということを言っているね。そんな、人間が今言っている「幸せ」なんていうものはあてにならん。天気と同じだ。すぐ曇ったりする。本当の幸せは、嵐になろうが、どうなろうが、決して消えないところの火なんです。火の世界、灯火(ともしび)の世界です。

「我は火を投ぜんために来たれり」

とキリストは言った。これは霊の火、「霊火」なんです。あるときは、霊を「水」と言った。

「お前たちはこの水を飲めば渇くだろうが、私が与える水を飲む者は渇かない」

と言った。キリストは、本当の世界を持っている人はそういうことをズバリズバリ仰る。ところが、キリストのことを「善き先生」なんて言ったら、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか」

と。とにかく、この聖書のキリストの言葉は、私は楽しくてしょうがない。この烈しい言葉が、もの凄い言葉が全部逆に力になる。だから、教えではない。

「福音は言葉にあらずして、力なり」

と、ひっくり返されたパウロはそう言った。

そういったことであるということを先ず前提として申し上げておきます。

●楽園喪失

今日は、「お前はどこにいるか」という題です。創世記の2章7節に、

7 エホバ神土の塵を以て人を造り生気(いのちのいき)をその鼻に吹き入れたまえり、人即

ち生霊となりぬ。

とある。古い聖書はいいんだよ、

「人即ち生霊となりぬ」

と書いてある。「生ける霊」となったと。私は古い訳が好きだ。素晴らしい訳だ。

8エホバ神エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其処に置きたまえり。
9エホバ神観るに美麗く食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ又園の中に生命の樹および善悪を知の樹を生ぜしめ給えり。

「生命の樹は緑である」

とはゲーテの『ファウスト』に出てくる言葉です。「生命の樹」と「善悪を知るの樹」がある。創世記のこういう神話は本当に素晴らしい。我々の現実をちゃんと語っている。

15エホバ神その人を挈て彼をエデンの園に置き之を理め之を守らしめ給えり。
16エホバ神その人に命じて言いたまいけるは園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得 17然ど善悪を知の樹は汝その果を食うべからず汝これを食う日には必ず死ぬべければなり。

「これを食べたら死んでしまうぞ。だから、これを食べてはいかん」

と。ところが、サタンの使いの蛇がやってきて、先ずエバを唆すわけです。

「お前さんは、この善悪を知るの樹の果を食べてごらん。そうしたら、神さまと同じように善悪を知るようになるよ」

と。「神さまと同じように」と言って、誘惑するわけです。つい、その口車に乗っかって、食べてしまう。「あなたも食べなさい」と、アダムも食べさせられてしまう。これが、神さまが「食べるな」と仰ったものを食べたということ。いきさつはどうであれ、要するに食べた。ということは、神さまの言葉に背いたということになる。

楽園を喪失した。パラダイス・ロストです。ミルトンの『パラダイス・ロスト』という素晴らしい本がある。私はかつて大学一年生の時に、ドイツ文学をやりながら、これを読んでいた。藤井武先生の所で日曜日の午後にこれを――全部は読みませんよ、その時には三分の一位――読んだ。ミルトンは失明してしまった。目が見えなくて、三人の娘さんに口授しながら、これをどんどん作ったんだから、大変なひとだな。『パラダイス・ロスト』（『失楽園』）から『パラダイス・リゲインド』（『復楽園』）、それから、『サムソン・アゴニステス』（『闘士サムソン』）。これが晩年の三つの傑作です。『パラダイス・ロスト』は大変な長い詩で、これとゲーテの『ファウスト』、ダンテの『ディヴィナ・コメディア』（『神曲』）のこの三つが三大作品です。もちろん、古いところではホーマー（ホメロス）の『イリアス』と『オデュッセイア』がある。藤井武全集の第九巻に藤井先生の訳がある。

●神に従って百%に歩いた唯だ独りのひと

「ディスオベイディアンス」(disobedince)「不従順」ということ。神さまに不従順である。従わなかった。これが「罪」なんです。神さまに従って百%に歩いた唯だ独りのひとはキリストです。

「十字架の死に至るまで従いたまえり」

と書いてある。

「私の意志ではありません、あなたの意(こころ)が成りますように」

と。自分の意志を殺して――「意志」でも「意思」でも、どっちでもいいけれども――

「あなたの言う通りに動きます」

ということ。だから、キリストは神さまを主として、自分を僕としているわけです。昔は奴隷というものがあったけれども、「僕(しもべ)」という言葉の方がなおいい。「ぼく」という言葉はここから来ている。私たちは「僕(ぼく)は……」と言って、しょっちゅう使っていた。この頃は、小さい子もみんな「俺(おれ)は……」なんて言っているね。「俺」なんて言うと、サタンの方になってしまう。「僕」でないとダメなんだ、本当は。高慢の霊はサタンです。平伏しの従順の霊は「僕(ぼく)」なんです。旧約聖書のイザヤ書に「エホバの僕(しもべ)」という素晴らしい詩があります。

テニソンの『イン・メモリアム』という詩の中に出てくる言葉に、

「我々の意志は我々のものだが、これはあなたのものとせんがためにある」

とある。我々の意志は、我々のものとして使っていると、それは自我になってしまう。我執になる。「自主的」という言葉はいい言葉だけれども、この「自主」の本当の意味は、

「アンダー・ゴッド」(神の下において)

でなければダメなんです。「自主であり自由である」と言うでしょ。もう、自主や自由がみんな好きなんだよ。けれども、この自由はマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』という本で言っているように、

「神さまに在っての自由、キリストに在っての自由」

なんです。これは手放しの自由ではない。ということは、神さまという主は絶対者でしょ。絶対者の僕となると、この僕には絶対的な質が来る。絶対的な質が来るから、実は僕は本当の自由を持っている。絶対者の質が来ているから、相対ではないんだから。

「クリスチャンは何ものにも依存しない。そういう自主な者である。また、クリスチャンは一切のものに仕える。そのような奴隷だ」

という二つの命題を掲げて展開しているのが、あの『クリスチャンの自由』という本です。ということは、そのことは同じことを別な角度から言っているだけのはなしです。これは、パウロのコリント書簡の中にある一つの言葉から気がついて、ルターが書いた。

「自分は神さまに、キリストに仕える者だが、これは大いに人を得んがためである」

と。「人を得んがため」というのは、人を救いの世界に入れんがためということです。

「そのために自分はどこまでも奉仕する」と。仕えるということは、僕となるということ。主の僕となると、これは人の僕となる。その「僕となる」ということは、人を愛するということだ。

●キリストの中に自分を投げ入れる

「愛する」ということは「人を助ける」こと。可愛がることではない。人を助けたり、救うことが「愛する」ということです。神さまを百％に受けとっていることを「信ずる」という。「信愛一如」の世界なんです。縦の関係が信の世界、横の関係が愛の世界です。

神さまの言を全面的に受けとっているのが「信」。これを「信受」と言う。信じ受けとる。私たちは神さまにいきなり行けないから、キリストに行く。キリストの中に一切を、自分を投げ入れる。「しんこう」という言葉は――始めは仰（信仰）いでいたっていいよ、その次は、本当は行（信行）かなければダメです――実は非常に行動的なんです。「信仰と行為」ではない。信仰自信が行為なんです。「信行一如」の世界なんです。「信ずる」とは、キリストの中に自分を投げ入れるという内的な行為なんです。

投げ入れてごらんなさいよ。そうすると、一つになってしまう。信じ交わる世界（信交）に入る。だから、私はもうあまり「信仰」なんて書かない。「信交」と書く。我々の雑誌が、『エン・クリスト』（キリストの中に）でしょ。英語で言うと「イン・クライスト」です。この「エン・クリスト」は交わる世界です。一如の世界です。これが本当の信交の現実なんです。そこに来なければ、実は本当ではない。みんな、「信仰、信仰」と言っているけれども。

「私は救われたということを信じていました。罪の贖いを信じていました」なんて、命題を信じていたって何になるか。

「その中に本当に入れ」ということです。もう私は、祈りは簡単だからね、

「主さま！」

と一言、全存在でもって叫びかかるというと、その中に入ってしまう。それだから、たちまち力が来る。一瞬にして。「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」よりかもっとはやい。そういうもの凄い現実なんです。だから、力が来てしょうがない。

●受け身の信

それで、サタンに誘われて、善悪を知るの樹を食べてしまった。それをミルトンは十二巻にわたって書いている。

「汝はいずこに在るか？」

というところは、十二巻のうちの第十巻に出てくる。それまで一体何を書いているかとい

うと、この詩人は大変なもんだよ。サタンのいろいろな計画をつぶさに書いている。全部、彼の詩的創造によるんだけれども。大体もともと、「サタン」と言ったって、これは優れた天使なんだ。優れたやつは、本当はあぶない。優れたやつはつい自分が高慢になる。知を誇る、優秀さを誇る。これがサタンに通ずる。だから、天使の中の立派な天使なんだ。

「これはひとつ神のごとくなってやろう」

と。神の聖意を受けとらないで、「神の如く」という。自分を高める。これがいかんです、「神の如く」というのが。上からの力で神の如くされる方はいいですよ、受け身なら。能動的になった「神の如く」はいけない。これは受け身でないから、受動ではないから。信仰もそうなんだよ。一生懸命でやる

「信仰の熱心」

というのがあるね。信仰の熱心はあぶないです。

「私は何もありません。ただ上から来るのを受けとります」

というのがいい。その点では、歎異抄のあの親鸞の信仰は素晴らしい。

「弥陀の御もよおしによって」

と言う。ヘタすると、日蓮の角度はこっち（能動的）なんだ。日蓮はみなこうだとは言いませんよ。もちろん、法蓮華経というものに全部、依存していますから。法華経が彼の中に化体したから、凄いことになった。

●キリストの化身

なんでも化体（かたい）しなければダメなんです。身体に化さなければ。化身（けしん）でも化体でもいい。キリストは神の化体であり、化身である。我々はキリストの化身となったなら、凄いことになる。それは質的にはそれになり得るんです、現実に。それは何かというと、キリストの霊を、聖霊を受けとることなんです。

だから、これを聖霊のバプテスマと言う。水でいくらバプテスマしたってダメだ、教会で水のバプテスマをやっているけれども。洗礼のヨハネが、

「私は水でバプテスマする。けれども、私の後から来るイエスというひとは聖霊と火でバプテスマする人だ。その靴の紐を解くにも私は価いしないような人間だ」

と言った。そのイエスは自分を何者ともしない。そのイエスは

「私はずいぶん霊的に強くなった」

なんて言いやしない。「霊的に強くなった」なんて思い上がったやつはみなサタンだ。

「無即無限無量」

というのはそういうことです。

「我々の信仰は…、私の信仰は…」

なんて言っている世界ではないということです。

●汝は何処におるや

３章のところに来て、蛇に誘われて、

1エホバ神の造りたまいし野の生物の中に蛇最も狡猾し。蛇婦に言いける
は神真に汝等園の諸の樹の果は食うべからずと言いたまいしや。2婦蛇に
言けるは我等園の樹の果を食うことを得　3然れど園の中央に在る樹の果実を
ば神汝等之を食うべからず又之に捫るべからず恐らくは汝等死なんと言給え
り。4蛇婦に言いけるは汝等必ず死ぬる事あらじ。5神汝等が之を食う日に
は汝等の目開け汝等神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたもうなりと。
6婦樹を見れば食うに善く目に美麗しく且智慧からんが為に慕わしい樹なる
によりて遂に其の果実を取りて食い亦之を己と偕なる夫に与えければ彼食え
り。7是において彼等の目俱に開けて彼等その裸体なるを知り乃ち無花果樹
の葉を綴て裳を作れり。8彼等園の中に日の清涼き時分歩みたもうエホバ神
の声を聞きしかばアダムとその妻即ちエホバ神の面を避けて園の樹の間に身
を匿せり。

9エホバ神アダムを召て之に言たまいけるは汝は何処におるや。

「お前はどこにいるのか」

と。今日の主題はこれです。神に背いたら、そのことの悪かったことを知って、今までは楽園の中を自由自在に歩いていたけれども、樹の下に隠れた。隠れたものだから、神さまがやってきて、

「汝は何処におるや」

と。ミルトンの『パラダイス・ロスト』では、アダムとエバがいろいろ話し合いをして、

「もしサタンの使いの蛇がやって来たら、我々二人でこれにぶつかろう」

と。エバは

「私はひとりでも大丈夫ですよ」

なんて言って、ひとりで歩いていると、蛇が

「これはしめた」

と言って、エバに話しかけるということになっている。その心理的な描写はなかなか大したもんですよ。私たちは、

「お前はどこにいるか」

と、神・キリストに問われているわけだ。勉強するはずの子どもが勉強しないで遊びに出かけてしまう。学校に行っているはずが、どこか他の所に行ってしまって、「汝いずこにあるか」と問われるわけだ。

●放蕩息子の砕け

ルカ伝15章の放蕩息子、あの弟の方が、

「私はもうどこかへ独りで行きたい」

と、どこかへ行ってしまった。お兄さんの方はお父さんの傍にちゃんといて、一生懸命で仕事をしていた。弟の方はさんざん悪いことをして、すってんてんになってしまって、

「私はやはり悪かった。家に帰ろう」

と。有名なキリストの譬え話ですね。お父さんはそれを見ていて、

「ああやって来たな」

と。乞食だか動物だかわからないような格好をしている。それで、お父さんは走って行って、これを迎えてやった。レンブランドが、父が息子を門口で迎えているような絵を書いたが、そうではない。本当は野原まで走って行ったんだ。レンブランドは、あれはちょっと書きそこなった。息子に、

「よく帰ってきた」

と。弟は心が砕けた。そして父は大いにこれをもてなしてやった。兄さんは「よくお前は帰ってきた」と、お父さんと同じに言わなかった。

「私はこんなにお父さんと一緒にいるのに、お父さんはさっぱりご馳走もしてくれない。こんなやつが帰ってきて、ご馳走するとは何ごとか」

と。言いそうなことだよね。ところが、この兄さんはお父さんと一緒にいたけれども、心は実は離れている。父と同じ心なら、「よく帰ってきたね」と言って、お父さんと一緒に迎えるはずです。自分の功績を、在り方を誇っている。これはダメです。

そういう、一人のひとが、魂がもとに帰ってきた。キリストは、

「我は罪びとを救わんためにやって来た」

という。一匹の羊が崖から落ちそうになって、あれを助けようとして、崖を下りようとする。これがキリストの姿です。残りの九十九匹はそっちのけにして。我々一人びとりは、

「汝いずこにあるや」

と問われている。心がどこかへ移っていたり、余計なことをしてみたり、悪いことをしてみたら、「汝いずこにあるか」と問われる。それで隠れたらダメだ、アダムとイブみたいに。

「すみませんでした」

と、キリストに全存在で向かって帰っていく。キリストは無条件にゆるす。

「お前はこうじゃないか、ああじゃないか」

なんて、人間のようにそんなことは仰らない。

無条件にゆるす。無条件の世界です。これも無なんだ。条件がいらない。

「聖書をどれだけ勉強したか、人をどれだけ愛したか」

そんなことではない。無条件です。そうすると、無条件にゆるされると、今度はそこには、

もの凄い力がくる。今度は、今までとはまるで違った歩き方をする。それで、本当に人を助けることになる。

●帰入は祈入

私は高等学校の校長をしていたときに、煙草を飲む生徒があるんだよ。煙草は学校の中でも外でもいかんと、煙草を禁じた。見つかると、校長室に呼ばれてくる。我はピシャッと言ってやる。

「けれども、お前はこの間違いをひとつの自分の踏み台として、今後はやめろ。やめなかったら、今度は学校から出してしまうから。そして、タバコをのむやつには、『お前は、それはよしたがいい』と、お前が今度は逆にひとを助けることになる。伝道することになる。そうしたら、お前の間違いはかえって本当のプラスになるんだぞ」

と、私はその角度からいつも諭してやりました。人間は誰だって躓いたり転んだりするんだよ。人の悪口なんか言ったら、きりがない。

それで、「何処にあるか」と聞かれたならば、直ちに立ち直る。それが場所であろうと、心の状態であろうと。要するに、すべては心の状態からきているから、立ち帰る。立ち返って、「エン・クリスト」「キリストの中」に自分を入れてしまう。キリストは無条件に入れてくださるから。そうすると、

「汝いずこにあるか」

は審きの言葉であると同時に恵みの言葉になる。「お母ちゃ～ん」と泣きながら帰ってくる子どもと同じだよ。ヘブライ語でもたった一字なんです。「アイエカー」という。「カー」というのは「汝」という字です。接頭語と接尾語からでき上がってしまう。

人間は、「汝いずこにあるか」と問われないようなことに完全になるには、それは地上ではおそらくなりえません。けれども、とにかく帰り行くことです。そして帰入する。行くばかりでなく、帰り入る。帰入は、本当は祈入、キリストの中に祈り入る。投げ入れて祈りいる。この祈り入るということは、普通の祈りではしないんだ。ただこっちに坐っていてお願いばかりしている。お願いが祈りではない。自分を投げ入れることが本当の祈りです。

●「1月4日　楽園喪失」

第十巻『聖書は大ドラマである』のここのところを読んでみましょうかね。「1月4日楽園喪失」（創世記2・8～17、3・1～24）の項です。

「**汝（おまえ）は何処（どこ）に居るのか。**」（**創世記3・9**）

「ユーフラテスの上流地方と思ったらよい、エデンの東の方に神は園を設けて、その園に見て美しく、食べて美味しい各種の樹々を生ぜしめ、真中（まんなか）には生命（いのち）の樹と善悪を

知る樹を植えた。そしてアダムにこう言った、どの樹の果もお前は「食べに食べて」（自由に食べて）よいが、善悪を知るの樹はだめだ、それを食べた日にお前は「死を死ぬ（必ず死ぬ）ぞ」と。ところが狡猾な蛇、サタンの使者かエバに、善悪の知るの樹を食べて神さまのようになったら好い、と唆かしたので、彼女はその口車に乗ってその実を食べ、アダムにも食べさせた。二人は直ちに善悪を知って、神の言に背いたという意識のもとに、木の下蔭に身を匿した。すると神はアダムに「お前は何処に居る⁉」と問いかけた。この神の声には審判と愛憫の両音がひびいている。ところがアダムはエバに責任をなすりつけ、エバは蛇のためだと罪を転化した。これがため二人は楽園から追放された。

悪いことをしながら、また弁解している。偽ったり、弁解したり、策略をもちいたり、みんなこれはダメなんです。「心の清き者」というのは、そういうことがないということです。単純率直なことです。

以上が楽園喪失神話のあらましだが、ここに人間の現実相を深刻に表している。アダム・エバの原罪は、そのまま我々の我執の罪である。万人は救いを要する。我々も「汝何処に在りや」と神に呼びかけられたら、直ちに神のみ許に立ち帰ろう。神は無条件に立ち帰りを欣び、迎えて抱き入れ給う。」

人間はなかなか無条件にひとを許さないですよ。

「でも、こうじゃないか。ああじゃないか」

と。神・キリストは無条件に許す。無条件の世界が私の魂を本当の世界に入れる。

十字架上の盗賊が二人いた。片一方は傲慢だから、

「お前は神の子なら俺たちを救ったらいいだろう」

と。他方は、

「もうさんざん私たちは悪いことをした。あなたは何も悪いことをしないのに十字架に懸かった。聖国にいらっしゃるときに、せめても、覚えてください」

と。この心砕けた十字架上の盗賊はキリストに、

「お前は今日、私と一緒に天国だ」

と言われた。キリストと一緒に最初に天国に入ったのは、さんざん悪いことをした片一方の盗賊――ただし最後の瞬間に心が砕けた――これが天界に入った。だから、人間が、心が砕けるか砕けないかによって、天国行きか地獄行きかが区別される。人類を二つに分けるものはそれなんだ。十字架上の二人の盗賊がそのことを表わしている。

●『パラダイス・ロスト』（失楽園）

ミルトンの『パラダイス・ロスト』（失楽園）の訳で、新しい口語訳の平井さんという人の訳はわかりやすい。これは東大の英文学の先生です。藤井先生の訳は、文語体が主となる文・

口語体みたいな訳ですが、少し読みにくいですけれども――まぁ、しかし、先生はよくこれだけのことを訳したですね――しかし、原文の行に非常に忠実に即して訳してある。岩波文庫にあるが、もう今は絶版かも知れません。全部で十二篇あるけれども。第一篇と第三篇と第九篇が特に出色です。

「地獄の蛇よ、彼ぞ高ぶりのゆえに
叛ける天使の全軍とともに天より
逐はれしとき、嫉妬と復讐とに燃えつつ
詐りをもて人類の母を欺いた。
けだしかれら天使の援助によりて
友僚超ゆる栄光をおのが身にのぞみ
そむかば至高者に比はうと
彼は信じた。かくて大望をいだき
神の聖座と王政とにむかひ
不虔の軍、驕傲の戦を天に
むなしく挙げた。至強者かれを
焔しつつ倒に情火天より
おそるべき墜落、燃焼をくはへて
底なき滅亡に投げおろした。そこにて
金剛の鎖、劫苦の火に住むべく、
かの全能者を戦にいどみしものを。」（藤井武訳）

そして、ずーっとサタンのたくさんの天使のうちの三分の一くらいを誘って、サタン軍をつくる。天使の軍とサタン軍との戦いがあるわけです。それから、男女の本質を歌っているところがある。第四篇の290行前後だ。

「身は貴き姿二人、直く高く
これは楽園喪失の前です
神に似て直く、本来の貴きを着、赤裸のいかめしさに万物の主と見え、見えてふさわしい。そはその聖なる顔に映えある造り主の姿が輝く。……」

●第二の宗教改革

「人を神の如くに造った」とあるが、あれは本当は「神の如く」ではない。

「神に即して、神の相に即して」

造られた。人間は本来、神と同質に造られているということです。

「エーベンビルト・ゴッテス」（神と同じ相）

とはゲーテの好きな言葉です。本来は、神と同じ相に、同質に造られている。

「衆生悉く仏性あり」

と同じこと。すべて仏性を持っている。

「山川草木悉く仏性あり」

という。だから、仏道の世界でもキリスト道の世界でも要するに、万物は神性、仏性を持っている。そういうことから、およそ今の世界は離れてしまっているものな。だから、本当の第二の宗教改革をしなければもうダメです。

「日本は経済大国から宗教大国になれ」

と、私は新聞に書いた。経済大国なんて言って、今度は土地問題で大騒ぎしている。冗談じゃないよ、これは。世界のどこにあるかというんだ。日本人というのは、より儲けよう儲けようとしてお互いに競り合うからから、どんどんどんどん値段が上がってしまう。なにも政治が悪いのではない。日本人自身がそのようなことなんです。そして、それを政治が押さえられない。また利害関係でなんのかんのやっている。冗談じゃないよ。

明治初年の吉田松陰だとか、坂本龍馬だとか、西郷南洲だとか、ああいう人たちがみな、犠牲的に仆れた人が本当の世界を持っていた。私は自分の詩の中ではそういう連中に必ず遭いますからね。もの凄い憤りを感じているから。

そういう、

「神性や仏性を本来は持っている。そこから迷ったから悟れ」

というのが仏教の世界だ。それを今度は取り戻した。キリストにあって取り戻す。

けれども、地上では、最後はそういう時は来ない。結局、今にカタストローフェ（大破局）が来る。聖書が黙示録で預言しているとおり。もう、この美わしい地球がどんどん侵されているからね、いろいろな意味で。もう救い難きものです、人間というやつは。どうにもならん、キリストやお釈迦さんが出てきても。文化文明の土台に本当の宗教がなかったら、この根っこの世界が枯れてきたから、世界という木は倒れてしまう。

それだけの大政治家が今はいないんだね。ゴルバチョフというのは相当偉いけれども、彼はそこまで本当に本音を吐いて言えるところまで魂が来ていない。世界中に一人もいない。やっぱり、リンカーンやグラッドストーンやビスマルクなんていうのは本当の政治家でした。なにさま、20世紀のもう世紀末、なにが「21世紀の希望」だというんだ。

いいですか、皆さん、もう烈々たる魂になっていただきたい。男の人でも女の人でも、老いたるも若きも、このキリストの霊が、聖霊が入ってきたら、もう恐いものはないですよ。いろいろな事にでっくわせば、逆に力が来ますよ。絶対に行き詰まらないですから。

●霊然の世界に魂は散歩する

「善悪を知るの樹」のところで、さっきちょっと言い忘れたことがある。知識の世界、道徳の世界は「善悪を知る」の世界です。けれども、もうひとつそれを乗り越えた世界、霊的

な世界に入ると、善悪を超越するんです。いわゆる判断を超越する。そうすると、超判断の世界になる。これが本当の霊法の世界なんです。道徳法の上が霊法の世界。そこに入ると、もう天的な必然で、「霊然」たる世界になる。天然自然というのが、今度は霊然の世界になる。霊然の世界の極まったところが「神然」の世界です。この神然を本当に歩いているひとはキリストだけです。我々はこの霊然の世界に魂は散歩するようなことになる。楽でしょうがない。いわゆる道徳の世界の、善悪、正邪なんて言って、区別している世界をもうひとつ超える。キリストが、

「神さまは善き者にも悪しき者にも雨を降らせ、正しき者にも正しからざる者にも陽を照らす」

と仰った。あれがこの霊然の世界です。

「そのごとく、汝らも全かれ」

とキリストは言った。水を割らずに。ということは、キリストの中に入れば、その完全性が質的に入ってくる。質的に。量的ではない。そうなって来たら、もう魂は楽でしょうがない。何も力む必要がない。むしろ、力んだら、おかしくなる。

まぁ、そういうわけでね。それはなかなか、あなた方は簡単には入れない。一応、私は言うだけのことは、水を割らずに言っておきます。

●祈り

祈ります。主さま。この不思議な創世記の物語を通し、私たちの現実に迫ってくださり、ありがとうございます。どうぞ、私たちもまた、あるいはエバであり、あるいはアダムですが、しかし、いつもあなたに立ち帰り、いや実に、「主さま！」と一言、全存在をもって聖名を呼びたてまつれば、直ちにあなたの中にある、その現実にいよいよ入っていくことができますように、願いたてまつります。

この兄弟姉妹たち、それぞれいろいろな課題や問題をかかえておりますが、ひとつも恐れません。あなたにあっては光が来ます。必ず、私たちの思いに優れるところの道が開かれていきます。どうぞ、あなたの驚くべきこの道、神からの道、神への道をいよいよ自在に歩いて進んで行くことができますように、願いたてまつります。

かくして、一人びとりが本当の力を、本当の希望が与えられ、ありがとうございました。どうぞ、毎日毎日を、「躓いても転んでもただ前進あるのみ」で進んで行きます。今、心からの感謝と讃美を、特に今日来られた方々の祈りと共に、主キリストの聖名にあって捧げたてまつる。アーメン。